

飛鳥井雅親『筆のまよひ』（学習院大学日本語日本文学科蔵）書誌解題と翻刻

武藤那賀子 毛利香奈子 伊藤優紀奈

増田さんご 石川貴洋 寺島美紗

富永曜子 平野広大 石澤一志

「キーワード ①筆のまよひ ②飛鳥井雅親 ③翻刻 ④書誌 ⑤飛鳥井雅枝」

一、はじめに

学習院大学文学部日本文学科には、文禄二年に飛鳥井雅枝（雅庸）によって書写された、飛鳥井雅親（栄雅）著の歌学書『筆のまよひ』（以下、学習院本と略称）が所蔵されている。『筆のまよひ』は、足利義尚の為に著された和歌の初学者向けの書であり、後代においても相当に読まれた。その伝本の数は非常に多く、五〇本を超える数の写本が知られている。この学習院本は、奥書に記された「文禄二年（一五九三）」を信ずるならば、現存する『筆のまよひ』の諸本中、最古写本ということになる。これまで主に利用されてきた『筆のまよひ』の本文

は『日本歌学大系』第五卷に所収されるもので、久曾神昇蔵本を底本および校合本として使用し作成されたものである。その奥書に拠ると、寛文八年（一六六八）に学習院本を転写したものであるという。しかし、本文を比較してみると、『日本歌学大系』第五卷と学習院本との間には、少なからぬ異同が見受けられる。

本稿は、現存最古写本にして本文的に大きな価値を有する学習院本の資料的意義を鑑み、書誌解題とともに全文を翻字して示すものである。

二、学習院本『筆のまよひ』書誌解題

翻字を掲げるにあたって、まず書誌事項を確認しておく。

【請求番号】 九一・二〇一／五〇〇四

【装訂】 綴葉装（列帖装）、一帖。

【書写年代】 文禄二年（一五九三）

【寸法】 縦一六・九cm、横一二・四cm。

【外題】 灰色地に、金切箔散料紙小短冊題簽（縦一一・八cm、横二・五cm）に「筆のまよひ」と墨書（本文とは別筆）したものを、表紙左肩に貼付。

【表紙】 鬱金色地に、海松色糸で蓮花・菊花・牡丹唐草模様織出の緞子古裂を付す。

【見返】 銀揉箔散・銀泥土坡笹下絵を描いた料紙をあしらう。

【本文料紙】 斐紙。

【紙数】 二括から成り、八紙一五丁・一〇紙一九丁、共に一丁分を表紙見返・後表紙見返に貼り込んである。丁数は三四丁、うち遊紙が前後に各二丁あり墨付は三二丁となる。

【字高】 約一四・〇cm。

【半葉行数】 八行。

【和歌】 和歌一首二行書。

【奥書】 三三丁裏に奥書がある。それによれば「此一帖

者、従大樹我祖雅親卿法名 柴雅、依被仰出注之、上

覧抄物也、尤以可為秘説者也、聊不可有他見而

已、文禄二年膺月五日雅枝（花押）（読点を付す）とあり、文禄二年（一五九三）二月、飛

鳥井雅枝の書写にかかるものと伝える。その筆

跡を署名のある懐紙・短冊などと比較してみる

と、それらと本書の筆跡は同筆と認められ、

よって本書は雅枝（雅庸）筆になるものと見て

よい。注3

【蔵書印】 「学習／院図／書記」（一才中央・朱陽刻）、「月

明莊」（二三ウ・朱陽刻）の二顆を捺す。また

「文私大研設整備補助／昭和44年（1014

7）」（三四ウ）のゴム印がある。

【保存状態】 良。

【箱】 桐箱入り。箱外題は、題簽（縦一六・九cm、横

三・七cm）を中央に貼付。「飛鳥井雅庸卿筆／

筆のまよひ文禄二年写」と墨書する。

【極札】 前見返し中央に極札を添付する。「飛鳥井殿

雅庸卿御本名哥はた、心の御奥書名判有一冊「琴山」（印）（縦

一六・一cm、横一・九cm）筆跡から古筆本家二

代目・了注4柴のもの判断される。



【その他】

古書調査カードが一枚添えられている。その内容は「鬱金地に鳳凰模様織出の緞子表紙左上に「筆のまよひ」の／墨書題簽を貼る。見返しは銀泥下絵模様、薄葉／斐紙綴葉装の冊子一帖にして、扉紙の上に「飛鳥井殿雅庸卿御本名（哥はた、心の、御奥書判有）一冊／（琴山）との極札あり、卷末の奥書に「此一帖者、従大樹／我祖雅親卿（法名榮雅）依被仰出注之、上覽抄物／也、尤以可為秘說者也、聊不可有他見而已、文祿二年／膺月五日（ウラへ）雅枝（花押）」とあり、雅枝は雅庸の／前名にして雅敦の子、榮雅（雅親）よりは五代の裔に当れり／歌学大系所収本たる寛文八年三器道頼所写本の／原本に当たるものなり、奥書に將軍家に撰進せし所とあり／は、足利義政か義尚かなほ決し難し、大系本第五卷／四〇一頁二行「忍恋」の下に「折恋」一六行「篠の庵の」の下に／「柴の庵、柴の戸、松の下庵」を脱し、四〇三頁三行／「忍恋」の下に「折恋」を脱し、四〇五頁二行「か、り火」の／下に「かやり火」を脱したる類は本書によりて訂すべし、伝本／多けれど、本書は最古の証本とすべきものなり、古き桐箱に／収む」とあり、本書の内容がかなり詳細に記されている。

書名	年月日		時	年	月	日	出
	年	月					
筆のまよひ	文祿	二年	膺月	五日			
飛鳥井殿雅親卿御本名							
改裝・保存	中	行	二	二	字		
一帖	三十二	枚	中	形	判	綴	一六八
							一三四

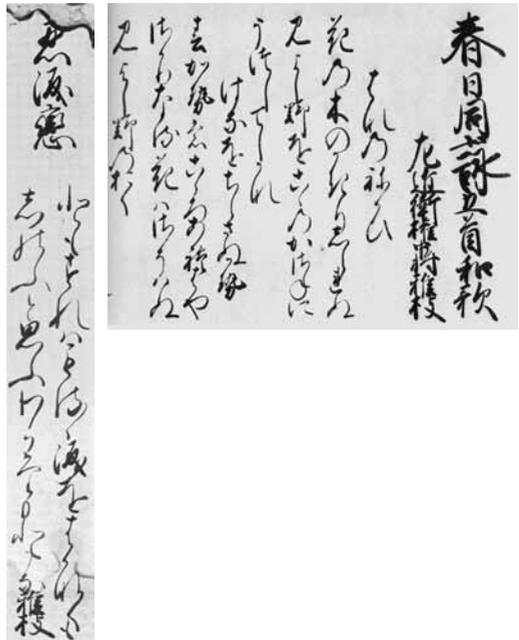
鬱金地に鳳凰模様織出の緞子表紙左上に「筆のまよひ」の墨書題簽を貼る。見返しは銀泥下絵模様、薄葉斐紙綴葉装の冊子一帖にして、扉紙の上に「飛鳥井殿雅庸卿御本名（哥はた、心の、御奥書判有）一冊（琴山）」との極札あり、卷末の奥書に「此一帖者、我祖雅親卿（法名榮雅）依被仰出注之、上覽抄物也、尤以可為秘說者也、聊不可有他見而已、文祿二年膺月五日、雅枝（花押）」とあり、雅枝は雅庸の前名にして、雅敦の子、榮雅（雅親）よりは五代の裔に当れり、歌学大系所収本たる寛文八年三器道頼所写本の／原本に当たるものなり、自本書に將て本家に撰進せし所とあるは、足利義政か義尚かなほ決し難し、大系本第五卷四〇一頁二行「折恋」の下に「此の庵、柴の戸、松の下庵」を脱し、四〇三頁三行「忍恋」の下に「折恋」を脱し、四〇五頁二行「かやり火」を脱したる類は本書によりて訂すべし、傳本多けれど、本書は最古の証本とすべきものなり、古き桐箱に収む。

蔵書印からも分かるように、学習院本は反町弘文荘の手を經てゐる。『二古書肆の思い出』によれば、本書は森繁夫（一八九二〜一九五〇）の旧蔵本で、その入手は昭和二二年七月であった。<sup>注5</sup>よつてこの古書調査カードは、反町弘文荘使用のものであることは間違いない。しかしその筆者は反町茂雄ではなく、昭和二二年九月ごろから弘文荘で仕入品の基礎的な調査を行うようになり、後に題簽・箱書の揮毫なども担当した、森銑三（一八九六〜一九八五）のものであらうと思われ<sup>注6</sup>。

以上、学習院本『筆のまよひ』についての、書誌および伝来などについて略述した。学習院本『筆のまよひ』は、これまでもその存在は知られていたものの、きちんと正面から取り上げられたことはなかった。しかし、飛鳥井雅親という室町時代後期和歌をリードした大物の著作を、近世初期にその子孫である雅枝（雅庸）が書写したものであるということだけでも、もつと注目されていいものであらう。本稿が、今後の研究の一助となれば幸いである。

注

- 1 初名雅繼、さらに慶長二年（一五九七）叙従三位と同時  
に雅庸と改める、一五六九〜一六一五。
- 2 例として、『書蹟大観』所収、詠草の画像を掲げる。



- 3 今回、雅枝の花押のある筆跡資料を探したが残念ながら見出せなかった。御垂教を乞う。
- 4 ウラ面が見られないため、鑑定時期などは未詳。
- 5 『二古書肆の思い出』三（平凡社、一九八八年、九六、九七頁）
- 6 『二古書肆の思い出』四（二一頁以下）。同五（九頁以下）参照。

四、学習院本『筆のまよひ』翻刻

凡例

一、改行箇所や和歌の書式は原本のままとし、利用の便を考え、頁毎に区切り、丁数とその裏表、行数を付記した。

一、原本に用いられている変体仮名は、すべて現行の平仮名に統一した。漢字は明らかに旧字体で書かれているものは旧字体にした。

一、翻読に問題のある箇所については、※印を付し、補注あるいは該当箇所の画像を各丁ごとに掲載した。

翻刻

【1オ】(遊紙)

【1ウ】(遊紙)

【2オ】

- 1 哥はた、心のをよふところ
- 2 にかなはむとすへしとそ申
- 3 侍しけにも不堪の者の上手の
- 4 やうをうらやみて秀逸のすかた
- 5 を心にかくれは道とをくなり
- 6 てよみいたることなかるへしされは
- 7 わつかにそんなしてえたらむしる
- 8 へにつきて事の道理をわき

【2ウ】

【3オ】

【3ウ】

- 1 まへよむへしかくしつ、まなひも
- 2 てゆかはしねんに心の發する
- 3 ことなからむや凡哥はさま一
- 4 かなならす初心の時に讀へき
- 5 をわかち侍るか大事にて侍る也
- 6 達者のよめるをためしに引く
- 7 面白きうたをこのみよまんとす
- 8 ことゆめく有へからす稽古に
- 1 ிரりもてゆかはなにとなきこ
- 2 とをけすらひもなくいひ出た
- 3 るもしねんに殊勝なるやうに
- 4 きこゆる也しやうとくの不堪なる
- 5 人は當世古風とてよむすかたを
- 6 してやかによみならふにやひとつ
- 7 の故實にて侍るへし哥の本に
- 8 は代々の勅撰にて躰を見した、
- 1 めてまなふへしたけたかくしか
- 2 も心ある哥を本とすへし但ふる
- 3 くよめる詞にもなにとやらん耳
- 4 とをくき、にくきやうのこと葉を
- 5 は初心のときしんしやくすへき
- 6 なり又諸藝何事も稽古す

7  
るにもひんきすきとてしねんの  
つゐてことにとりむかふわざは更に

【4才】

1  
一きはあかる事有かたきよし昔  
より申つたへ侍り千卷万巻の

2  
抄物をあつめたりといふともな

3  
すことなく見ることなくは一度の所  
作にはしかしたま／＼見おほえたる

4  
事も又うち置ぬれば亡却の心

5  
にて又たはらるゝことのみ也細々時々  
此ことをなせはをのつから心に残り

【4ウ】

1  
口にすさふのみ也むかしもいまも  
すきに色々ありなすことはなくて

2  
書籍抄物をあつめもつすき

3  
もあり又なすことを本として

4  
抄物に心をかけぬもあり和漢と  
もに此こと人々の心おなしからす

5  
た、所作と知見とおなしかるへき

6  
をそよしとは申すされはふるき序

【5才】

1  
にはく本文法聞をもさとらす  
た、かなの四十七字のうちにおもふこ

2  
とを詞に三十一字にいひつらぬる

4  
ゆへに八雲のそこをしのき敷鳥  
のさかひに入すきたりとのみ思へる  
なるへしといへりかならずさいかく  
によるへからすとそ申侍る

【5ウ】

1  
一 梅花久薫といふ題は多年多

2  
春の心也春のうちにて久心には  
有へからす但哥のやうたいにて

3  
春の久こゝろも侍らん歟

4  
松契春此契といふ字もあなか

5  
ちになれとも祝のこゝろ又とも

6  
なふ心にてなるへき也友といふ

7  
字もおなしこゝろなり

【6才】

1  
一 春雪と残雪といつれも春の

2  
題にて侍りされともいさゝかかはる

3  
へき也残雪といふは去年のまゝ、

4  
のこる雪也春雪とは春に明て

5  
ふる心也春雪といたしたるには残雪

6  
の心にてくるしからすといへりさ

7  
も有へし残雪といたしたるに春

8  
ふる躰はその難有へき歟つねにあ

【6ウ】

1 は雪とよめるは春ふるをいふ也  
2 但かやうの事も證哥によるへし  
3 隣梅隣柳など出したる隣  
4 の字むつかしき題なりとなり  
5 とも古哥あまたよめりた、中  
6 かきのへたて又は軒端ならへて  
7 見るあるしのゆかしきなどにて  
8 隣の心かなふへきなり

【7オ】

1 古寺といふ題はこれもふる寺  
2 とよむ詞常のことなれとも寺  
3 とよまて古寺のふるき名所を  
4 寺めきたるやうによむ也難波泊  
5 瀬又三井のふる寺志賀など古  
6 寺の在所也鐘など燈法の聲聞  
7 などは寺によむこと也檜原かおく  
8 かはらの姿などよむは寺の心也

【7ウ】

1 野亭野店と出たるはいづれも  
2 野の家の心なり  
3 時雨といたしたる題は必冬の  
4 題也哥には焮の紅葉よりよみ  
5 ならばせとも本は冬の題なるへし  
6 秋の物によみそへ侍らはあきの

7 時雨なるへした、よむは冬の  
8 しくれ也

【8オ】

1 四季雜の哥には戀のこゝろ  
2 よむへからすと申せとも述懐の  
3 心をこめてよめは戀のうたに  
4 似たることあり

5 さみたれはまやの軒端の雨そゝき  
6 あまりなるまでぬるゝ袖かな  
7 ひとりぬるやとのとこなつ朝なく  
8 なみたの露にぬれぬ日そなき

【8ウ】

1 これらは述懐の涙也かくのとき  
2 のことはさらにくるしからす哥の  
3 躰によりて戀にすることもあり  
4 分別すへき事也

5 一首の哥の中におなし文字  
6 二あること嫌こと也又そのうちに  
7 も五月雨とよみて雨といふこと  
8 はくるしからす又木とよみて梢其

【9オ】

1 もこのまぬことながら梢といふ  
2 字あるによりてしせむにはよむく  
3 るしからす

- 4 一 五月長月とよみて又末に月  
 5 といふ字よむへからす句を重ては  
 6 くるしからす長月の有明の月  
 7 など、はよむ也五月やみ月はかけ  
 8 見ぬなどやみのことはきはす
- 【9ウ】  
 1 一 やよひ二月とよみてはくるしからす  
 2 虫と出たる題には松虫鈴虫蛩  
 3 はたをりいづれも心にまかせて  
 4 よみ候名をさして出したるには  
 5 かならずその名つけてよむ  
 6 へき也  
 7 柳弁春といふ題わかまふといふ  
 8 は春の色をあらはして見せたる心也
- 【10オ】  
 1 一 山と出たるには嶺をよめは同  
 2 心也嶺といたしたるには尾上と  
 3 よみたる證哥多也  
 4 海邊と出したるには海のたくひ  
 5 磯濱湊などをよみてなるへき也  
 6 又磯濱湊など出たるに海のこと  
 7 はかりはなりかたし  
 8 庭と出たるはまかき軒端など
- 【10ウ】  
 1 一 庭と出たるはまかき軒端など
- 1 一 にてなるへしかきねかきほな  
 2 とも同ことなるへし砌も庭の  
 3 心なり  
 4 山家と出たるはあなかに山の  
 5 下庵又山里など山の字いら  
 6 ねとも篠の蘆柴の蘆芝の戸  
 7 松の下蘆叟のはしら竹のかき  
 8 などにて山家の心あり
- 【11オ】  
 1 一 田家田里これも同心也しかはあれと  
 2 いさ、かかはる也田家は爍の田など  
 3 もる時にかりそめに蘆をむす  
 4 ひて鹿鳥ををひてすむをもいふ  
 5 へし田里とはいづれも田邊につ  
 6 くりならへてすむをいふへし但  
 7 これらの相違はふるき哥にも  
 8 見えかたきこと有へし
- 【11ウ】  
 1 一 あま雲とよむこと二のかくこ  
 2 あり天雲を常にあま雲とは  
 3 いふ又雨雲をもよむことあり大  
 4 旨は天雲のことと心えへき也  
 5 旅と出したるは旅行旅宿旅  
 6 泊いづれをもよむへき也躡中

7 もおなしこと也又旅泊と出し  
8 たるはかならず船のとまりをよ

【12才】

1 むへき也旅行は道を行心也  
2 野山關渡にても心にまかせ  
3 てよむへき也又旅宿は常の旅  
4 宿草の枕なとまてのこと也  
5 よくく／＼分別すへきなり

6 夏の題に餘花と出たるは夏ま  
7 てのこる花のこと也をそ桜と  
8 同事也夏木立の中に有をいふへし

【12ウ】

1 殘花と出したるは春中にひ  
2 さしく殘るをいふ也

3 夏のはしめの題に首夏といふ  
4 は四月一日二日の比のこと也又更  
5 衣と首夏の次にいたしたるは  
6 衣かへの心也これも四月一日より  
7 夏衣にかふる心なるへし更衣と  
8 いふ題に首夏の心をはよむへし

【13才】

1 首夏に衣かへのはかりにては  
2 首夏の心かすかなるへし

3 夏の題に端午興と出したるは

4 五月五日のこと也あやめのこと也  
5 又五月の玉をかくるなとよめは

【13ウ】

1 孤嶋霞といたしたるは一の嶋也  
2 されともたゝしまをよめはくるしからす

3 五月雨涉<sup>レ</sup>※1日これは日かすを  
4 ふるこゝろ也

5 花如舊といふはむかしにかはら  
6 ぬこゝろなり

7 春の題に野遊とは野にはる  
8 人々あそふことなり花を見  
9 すみれをつみわかなをもとめ  
10 ところをほり小弓のあそひな

※1 このレ点は底本・諸本にも有り

【14才】

1 とするこゝろ也

2 遊絲とはあそふ糸なり春は  
3 よくはれたる日空に糸のやう  
4 にちり／＼とみたれみゆること

5 ありそれをゆふしとは申なり  
6 戀の題のことさま／＼のことを  
7 いたせり戀の本意といふは初戀

8 忍戀祈戀待戀不逢戀別戀

【14ウ】

恨戀忘戀絶戀久戀これら

なり又よせ戀とて寄月戀

寄山戀寄海戀など万物に

よせて出すも心はひとしきなり

よせ戀の題には忍戀いのる心

うらむる心逢心別の心いつれ

にも讀へき也ふるき名所など

にもよそへて心をさま／＼にめく

【15オ】

らすへし祈戀といたしたるには

かならずその心をとつめて

よむへきなり戀の哥には春夏

秋冬いつれをよむともくるし

からす

樹陰蟬など出たるはた、木ふ

かきしけみの中まで也杜など

をよみてもおなしことなり

【15ウ】

樹陰納涼なども木の陰にて

をのつから題の心をそむくへ

からす

二星適逢といたしたるもた、

字はあまたあれとも七夕のうへ

6 をよめはかなふなりこれらの

7 たくひおほかるへし

8 一 初鴈連雲これも焮の雁の空

【16オ】

1 にとふ躰なり

2 一 深更といたしたるはふかき夜

3 の事なり

4 一 暁更と出したるは明かたのこと

5 なるへし

6 一 商律欲盡とは九月盡暮秋

7 のことなり

8 一 春の末に季陽已闌と出たる

【16ウ】

1 は三月盡暮秋<sup>(マユ)</sup>※2の事也

2 一 幽栖春月かすかなる栖の心也

3 閑居と同心なるへし

4 一 春日遅々といたしたるは春の

5 日のなかき心はかり也

6 一 簾といへる題にこす玉すたれ

7 玉たれみすともあしすたれ

8 いやすたれいやすとはかりもよむ

※2

諸本では「春」。三月の文脈から考えても、誤写と  
思われる。

【17オ】

1 なり又た、すこしになとも

2 よむへきなり

3 一 戸外花戸外藤など出たるは

4 た、戸までのことなるへし松の戸

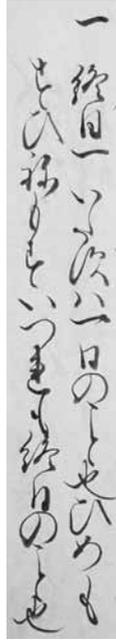
5 槿の戸のことなるへし奈の戸槿の

6 戸柴の戸なともよむへきなり

7 一 終日（マヤ）※<sup>3</sup>いたすは一日のこと也ひめも

8 すひねもすいつれも終日のこと也

※3 「巨」か。どちらにしても意味が通らない。



【17ウ】

1 又あくるよりくる、まてとよむ

2 もおなしこと也

3 一 卯花交墻卯花作墻この二の

4 題はさむといひては兩方から

5 はさみたてたるやうにさく

6 をいふへし又かきをなすといふは

7 垣をつくりたるやうにさきたる也

8 心かはるへし

【18オ】

1 一 早苗處々これは方々にある心也

2 一 對橋問昔といふ題はた、橋に昔

3 のことをいひいたしたるなり

4 一 尋花尋郭公尋虫など、出した

5 るにはあなちち尋行とよまね

6 とも花ゆへにいくへの山に分の

7 ほるなどいひ霞をしのき雲を

8 へたて、なとよめはたつぬる躰

【18ウ】

1 なりかくのこときのたくひ一を

2 もつて萬をさとることなり

3 一 花洛月洛陽月といたしたるは

4 いつれも都の心なり内裏のこと

5 をよむもみやこの心なるへし

6 まして花のみやこ月の都とよみ

7 ては勿論のことなるへし

8 一 稲妻はかならず焔の題也夏もす

【19オ】

1 一 露と一字いたすも焔の題なるへし

2 四季にをくものなれとも秋の

3 物にさためたり

4 霜は又秋よりをけとも冬の

5 物にさためたり焔もよむへき

6 こと勿論なるへし

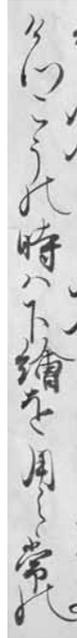
8 一 短冊の事色々いつれも用へき也

【19ウ】

- 1 青雲紫上下事大略は青雲上に用る也但紫を上になすことも時々有へし紫を賞翫するは藤のゑん萩のえん又は釋教に上にして用こと面白なり
- 2 白鳥の子を用ることも常の事也
- 3 細々の會には引合なとも用也又
- 4 けつこうの時※4は下繪を用こと※4常の

※4

「こと」か「之」か。難読箇所。



【20オ】  
ことなり

- 1 出題の事題者の心得大事也貴き
- 2 所の新造の家などにては哀
- 3 傷又は無常なといふ題はいたすへ
- 4 からす又新造の家は火の類か、り
- 5 火かやり火煙などいひ出すへからす
- 6 た、初心人はいくたひもやすき
- 7 題を出して心をたひくにあたら

【20ウ】

1 しくよむへき也

- 2 一度立春といたしたらは二度め
- 3 は初春と出し三度めは早春など
- 4 いたすそのうち又ちとつ、かへたく
- 5 おもは、初春霞とも氷とも風と
- 6 も雲ともそへていたしかふれば
- 7 心あたらしくなること也
- 8 この心にて花紅葉月雪もお

【21オ】

- 1 なしやうに心得へし先題は百
- 2 首出すをかしらとすそのうち
- 3 五十首三十首廿首以下七夕は七十
- 4 首なといたすなり
- 5 一 明題抄一部の題を連々
- 6 見て出す也千首など詠事は
- 7 近世には稀な事也百首題は明
- 8 題抄に出しやうあまた見えたり

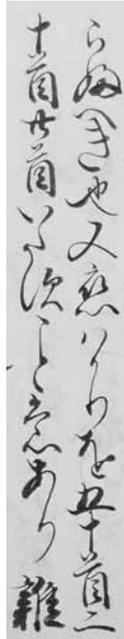
【21ウ】

- 1 一 五十首出す時は春十二夏七秋
- 2 十二冬七戀六雜六かやうに出す也
- 3 三十首題の時は春七夏三秋七
- 4 一 冬三戀七雜三此分也但大概是
- 5 如此いたせともかならずしも一に
- 6 きたまらず春は春の題をあまた

7 出して戀雜を分て出すこともあ  
8 り以下是をもつてをしはかるへし

【22オ】

1 四季のうちにては花月紅葉を  
2 はあまた出す也ふかき題を見な  
3 らふへき也又戀はかりを五十首<sup>(マ)</sup>二<sup>※5</sup>  
4 十首廿首いたすこともあり雜  
5 はかりも同事也色々うけむ  
6 して出す事題者の故實に  
7 あるべし又句題とて三代集の哥  
8 の一句をとりて出すこともあり  
※5 21丁裏3行目にある通り「五十首三十首廿首」であ  
るはずの箇所。誤写か。



【22ウ】

1 出しやう大事也よみやう口  
2 傳にあり  
3 一 年始又は祝言の時は先一首の  
4 題とて祝の題を出すへき也  
5 月次の會には三首題常の事也  
6 これも春中は上二は春の題末

7 一首は戀雜のうちを月ませに  
8 うちかへくいたす也又三首ながら

【23オ】

1 花を出し月をいたすこともあり  
2 二首題をいたす事もあり常  
3 の事なり  
4 一 立春といふ題には必春のたつ  
5 といひ春のくるといひてせつふん  
6 の朝の事也代々集の巻頭の哥は  
7 みな立春の心也それにてこゝろ  
8 うへきなり

【23ウ】

1 一 た、早春初春は大かた春のはし  
2 めの心をよめはしかるへきなり  
3 この二の題に立春の心をよみ  
4 たるはくるしからす立春と出たるに  
5 初春早春の心をよめは大やう  
6 にてこゝろ相違する也よくく  
7 分別すへし  
8 一 曙といふ題には横雲あけくれ

【24オ】

1 一 明ゆく空なとよめり  
2 朝といふ題には明ほのとよみ  
3 たる事あり朝霞といふ題にて

後鳥羽院御製に

4 しほかまの浦のひかたの明ほの、

5 霞にのこるうきしまの松

6 とそあそはしたり

7 夕といふ題には暮雲のはたて

【24ウ】

1 たそかれ時などは夕の事也如此

2 の類おほかるへし

3 一 先題をとりてはことはをあんし

4 てそれをたよりにしてのちに

5 心をもとむることも侍れとも大略は先

6 心をもとめて後詞つくるかよき也

7 一 古哥をとりてよむ事もあま

※6

8 文脈は「く」が正しいが「る」にしか読めない。



【25オ】

1 わろし時々はとりてよむへき也

2 三十首ほどの内には十首又は十四五

3 首も本哥にすかりてよむ事

4 くるしからぬ也

5 一 題をとりては當座の時は五首も

6 三首もとりたる題を先かたの

7 ことくも一首つ、よみわたしてかた

8 ちをつくり出してをきて又人々

【25ウ】

1 哥いまた出こすは其時又一首つ、も

2 よみなをして人にも談合すへき

3 なり前の一首よりよくよまんと

4 思ひてのこりいまた出こねはいそ

5 く時いよく心さはかしくなりて

6 よまれぬことありよくこ、ろ

7 うへきなり

【26オ】

1 同こと葉おなし文字なきやう

2 よくく見合てよむへし三代集

3 の哥人丸貫之などの時代の

4 哥はおなしこと葉なといくらかも

5 侍る也中古よりいまにいたりては

6 このことかたくいましむる也

7 ふるき抄物双昏を見るにも初

8 心の人には俄に題をとりてみる

時春の題をとりては春の古

哥を見夏は又夏の哥をみて

をもむきをしるへし戀雜にいた

【26ウ】

3 　　るまでおなしかるへし

4 一 又哥の功入てのちはしからす其

5 故は古哥をとりて今よむには今

6 我花紅葉月雪の哥をよまは

7 古戀雜の哥をとりてよむへき也

8 又我戀雜の哥をよまは古花

【27才】

1 紅葉四季の哥をとりてよま

2 んとたしなむへき也

3 一 神祇といふ題にはいつれの神の

4 御事をよみてもかなふへき也社

5 頭といふ時神かき又みつかきい

6 かき社など、よめはかなふ也神祇

7 には社頭の心をよみても相違有

8 へからす社頭にはた、神の御名はかり

【27ウ】

1 　　などよみてはいさ、か相違すへき也

2 一 風と嵐とこれも事によりてかはる

3 へし風にはあらしとよみたること

4 あり嵐といふ題に風とよみたる

5 こと相違すへき歟

6 一 述懐といふ題には我身のをろ

7 かなる心をつねによむ也但それ

8 はかきるへからすなにごとにても

【28才】

1 思ひをのふる心にて君をもち

2 ひ我身をも又いはひ世をほめ又

3 浮世をそむきたき心はへをも

4 よむ也

5 一 七夕といふ題にてたなはたとよむ

6 は勿論の事也天河をよみ紅葉

7 の橋かさ、きのはしなとよむ也

8 た、星のあふせなともよむへき也

【28ウ】

1 一 暁には有明八聲の寢覚夢

2 のさむる明かたなと同前なり

3 一 禁中花月なといたしたるは内

4 裏の御事なり九重百敷大内山

5 雲の上なともよむへきなり

6 一 夏の題に牡丹と出たるはほたんと

7 はよますふかみ草とよむへき也

8 哥にはふかみ草とよみ題の時

【29才】

1 　　はほたんとよむへき也萬葉集な

2 とにはさまくよむことあり

3 一 秋の題に立秋早秋初秋此出し

4 やうは春のはしめの題とおなし

5 かくこなり

6 一 翫花翫月などこのもてあそぶ  
心はた、見て賞翫の心也桜萩  
藤などは手折もてる躰に有へく候

〔29ウ〕

1 一 雑の題に眺望と出たるはなかめ  
たる心也浦にても山野春夏  
焮冬いつれのとときにてもおなし  
こ、ろなり

5 一 天象地儀居所植物動物雑物人  
事天象には空のこと雲風雨霞  
煙月星雪霜などよむなり  
地儀には山河海野關浦居所

〔30オ〕

1 一 には家門墻床戸庵軒端な  
とのたくひ也植物には草木の  
たくひをよむへき也動物には鳥  
獸の事なり雑物は鏡鐘船枕硯  
筆弓箭玉絲など万物をよむ  
へき也人事は人の上のことなり戀  
述懐をもよむへきなり

8 一 哥合に心うへきこと哥の難と

〔30ウ〕

1 一 てきらふことあり

2 一 平頭病とて哥の上句のかしらの

3 字と下の句のかしらの字とおな  
しかるへからす

5 一 聲韻病とて上句のはての字と  
下句のはての字とおなしかるへからす  
文字あまりの哥このみよむへからす

8 一 名所に花紅葉萩鹿などやう

〔31オ〕

1 一 の物はふるくよみならはしたる  
在所のほかにはそ、ろによむへから  
すされは古哥をみるにはさやう  
の物よみたる哥を心にかけて  
みるへし

6 一 平頭病

7 五月雨にみかさまさりてうきぬれは  
さ、てそわたるさの、ふなはし

〔31ウ〕

1 一 聲韻病

2 見すは又くやしからましみつもの江の  
うらしまかすむ春の明ほの

4 一 題の心をたしかにしてよむへし又

5 本の題をはそはにして萬の物を

6 本になるやうによむへからすとへは

7 花といふ題をとりて花といふ

8 ことを一首の中にをきたりとも

【32才】

1 月鶯雛などのことをもつ  
 2 はらのやうによむましきなり  
 3 これらの儀は哥合にかきらす  
 4 哥ことに心うへきなりされは哥  
 5 合には傍題の病とて嫌ことも也

【32ウ】

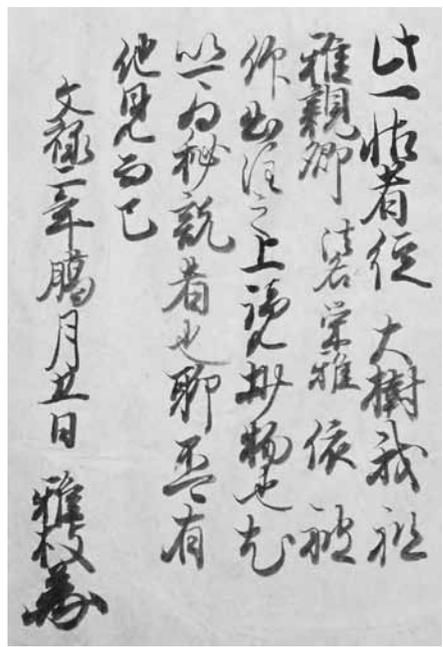
8 「月明莊」(左下隅・朱陽刻長方印)



【33才】

- 1 此一帖者從 大樹我祖
- 2 雅親卿 法者宋雅 依被
- 3 仰出注之上覽抄物也尤
- 4 以可為秘說者也聊不可有
- 5 他見而也
- 6 文祿二年膺月五日 雅枝 (花押)

8 7



【33ウ】(遊紙)

【34才】(遊紙)

【34ウ】(遊紙)

参考文献

・佐佐木信綱編『日本歌学大系』第五卷(風間書房、一九六四年)

付記1

・書誌情報執筆・石澤一志先生(国文学研究資料館特定研究員・学習院大学非常勤講師)

・翻字担当者と配分は以下の通り

- 一丁表～五丁裏 毛利香奈子
- 六丁表～九丁裏 伊藤優紀奈
- 一〇丁表～一三丁裏 増田さんご
- 一四丁表～一七丁裏 富永曜子
- 一八丁表～二一丁裏 石川貴洋
- 二二丁表～二五丁裏 寺島美紗
- 二六丁表～二九丁裏 平野広大
- 三〇丁表～三四丁裏 武藤那賀子

付記2

この調査は、二〇一六年度の「日本文学史特殊研究——書誌学入門——」（於：学習院大学、講師：石澤一志先生）の授業中に翻字作業を行ったものである。貴重な資料の撮影および掲載をご許可くださった学習院大学文学部日本語日文学科に御礼申し上げます。書誌情報の執筆および、準備段階でのご指導、ご教示いただいた石澤一志先生に深く御礼申し上げます。

（むとう・ながこ 学習院大学国際研究教育機構

PD共同研究員・博士後期課程修了）

（もうり・かなこ 博士後期課程）

（いとう・ゆきな 博士前期課程修了）

（ますだ・さんご 博士前期課程修了）

（いしかわ・きょう 博士前期課程）

（てらしま・みさ 博士前期課程）

（とみなが・ようこ 博士前期課程）

（ひらの・こうた 博士前期課程）

（いしざわ・かずし 国文学研究資料館特定研究員・

学習院大学非常勤講師）